

—グラビア—

濟生学舎時代の野口英世

志村 俊郎¹ 弦間 昭彦²¹ 独立行政法人東京労災病院第二臨床検査科² 日本医科大学

Hideyo Noguchi in the Saiseigakusha Era

Toshiro Shimura¹ and Akihiko Gemma²¹Department of the Second Clinical Laboratory Medicine, Japan Labour Health and Safety Organization Tokyo Rosai Hospital²President, Nippon Medical School

図1 濟生学舎時代の野口英世
制作 彫刻家 後藤良二
日本医科大学同窓会館濟生学舎ギャラリー所蔵

はじめに

野口英世の濟生学舎時代の報告は、極めて少ないと言われています¹。濟生学舎時代の野口英世の先行研究は、唐沢信安先生の「濟生学舎時代の野口英世—細菌学への道程」を嚆矢としています²。本稿では、濟生学舎時代の新しい「野口英世のレリーフ肖像」と濟生学舎出身の野口英世にふさわしい野口の揮毫した書掛軸「濟生」を本学に展示する機会を得たことから、これらの橋桜会館内日本医科大学濟生学舎ギャラリーでの野口の新展示と野口にまつわる直筆書簡を（公財）野口英世記念会の許諾を得て供覧します。特に、濟生学舎時代の野口英世の今まで未制作であったレリーフ肖像と、野口が錦を飾って一時帰国した1915（大正4）年の濟生学舎関連の新たな事実を中心として本グラビアに報告します。

1. 野口の濟生学舎時代のレリーフ肖像（図1）

図1の野口のレリーフ肖像では、これから濟生学舎で医学を学ぶ希望に満ちた情熱的な輝きを持った野口の瞳を見

ていただきたいと思います。なお、本レリーフ肖像制作者の後藤良二先生は、2008年本学に新田正夫氏より寄贈された野口英世博士の胸像も制作しており、この胸像は、日本医科大学の前身の濟生学舎創設者長谷川泰先生の胸像（3度の日展入選者である昭和35年本学卒業生市堰英之先生制作）とともに、同窓会館内の日本医科大学濟生学舎ギャラリーのエントランスホールに並び置かれています。

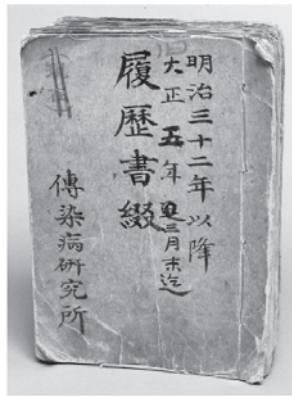
2. 野口英世の直筆履歴書（図2）

旧傳染病研究所の1899（明治32）年以降1916（大正5）年3月までの履歴綴の野口の直筆履歴書には、野口は、明治29年11月から明治30年8月まで、「濟生学舎に医術を学ぶ」と記載されています。野口英世は、明治30年濟生学舎を卒業しています。

3. 野口英世の直筆書簡（図3）

野口英世の濟生学舎入学の事実は、野口より猪苗代高等学校の恩師小林栄先生宛ての明治30年4月19日付けの

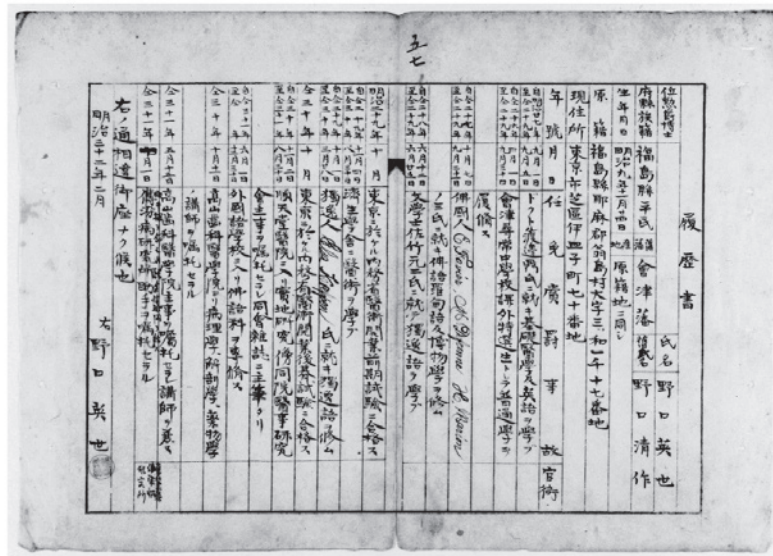
伝染病研究所・血清薬院 (明治)
011上



伝染病研究所履歴書綴
医科学研究所蔵履歴書綴

A

伝染病研究所・血清薬院 (明治)
012下



医科学研究所蔵の伝染病研究所履歴書綴にある野口英世の履歴書

B

図2 A 東京大学の附属機関，医科学研究所（旧伝染病研究所）の1899（明治32）年以降1916（大正5）年3月までの履歴綴 B 野口英世直筆履歴書
〔画像提供：東京大学医科学研究所〕

直筆書簡には「小生4月1日に済生学舎ニ入舎イマス」（野口手紙の原文）と書かれそこには、舎長長谷川泰は、越後の産で医学者にして有力なる代議士に御座候と泰の簡略歴にも触られています。この書簡は、野口英世書簡集IV（財団法人野口英世記念会平成18年5月21日発行）41頁に記載されています。

4. 野口英世の揮毫した書掛軸「済生」（図4）

野口英世の揮毫した書掛軸「済生」は、野口が1915（大正4）年9月に日本への一時帰国した際に、浄土真宗本願寺派のお寺「樹林山 西円寺」（福島県耶麻郡猪苗代町字新町4899）の檀家である野口の幼馴染で一家をあげて野口を支援していた八子弥寿平氏宛に、野口が友人としての情愛

を込めて寄贈したものであります。そこでの為書きには、「1915（大正4）年仲秋 予帰省之際 追想故八子大人（参考：八子弥寿平：当時の野口清作の猪苗代高等学校同級生³⁾）之友誼 英世」とあります。現在の野口の書掛軸「済生」の所蔵先は、先にも述べた福島県耶麻郡猪苗代町「樹林山 西円寺」であります。なお、野口の揮毫した「済生」は、野口の卒業した明治期の私立医学校「済生学舎」の建学精神である「貧しくしてその上病気で苦しんでいる人々を救うのが、医師の最も大切な道である」との「済生救民」の「済生」であります。

5. 野口の一時期帰国そして野口のはがき（図5）

野口は、1915（大正4）年9月5日から同年11月4日ま

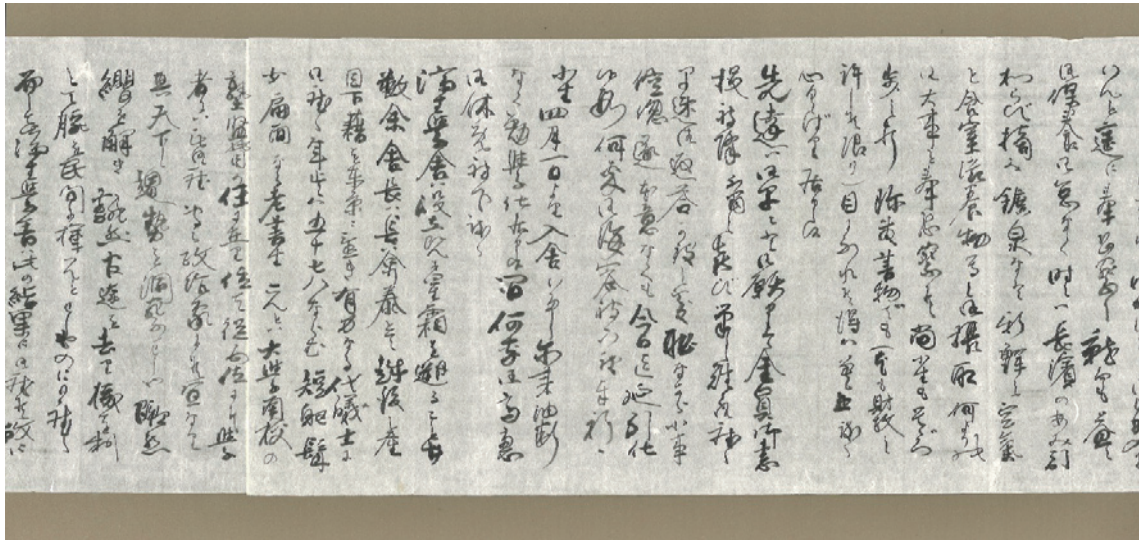


図3 明治30年4月19日付 小林栄宛野口清作直筆書簡（部分）
（（公財）野口英世記念会より使用許諾）

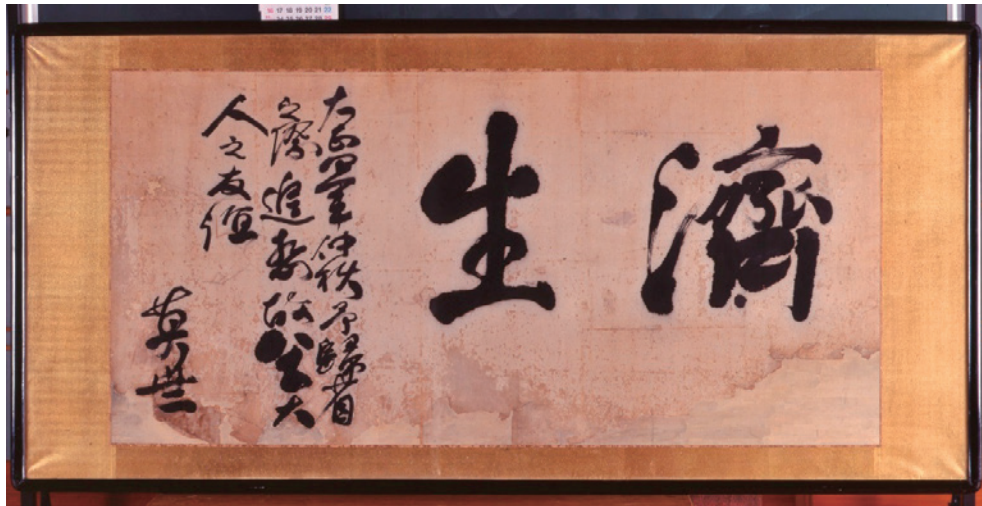


図4 大正4年9月5日野口清作君の一時帰国の際の野口英世揮毫の書掛軸「濟生」
（（公財）野口英世記念会より使用許諾）

で日本に一時帰国しております。野口は、研究題目スピロヘータバリータの研究に対して贈られております1915年度第5回帝国学士院恩賜賞の受賞、総理大臣大隈重信侯邸での大隈侯との面会と多忙を極めておりましたが、野口が卒業した済生学舎同窓会との歓迎会が2回開かれておりましたので記載します³。一回目の野口の歓迎会と講演会は、同年9月22日上野精養軒で開かれ、野口は「渡米前後の事情とアメリカ医学事情」と題して講演をしております。二回目の野口の歓迎会は、同年10月畑嘉聞（明治35年済生学舎卒業、大正7年野口英世の紹介で米国ロックフェラー研究所に留学、その後宇治山田市で開業）は、地方の済生学舎の同窓と相談し、宇治山田市の旅館五二会館（伊勢市史第4巻近代編2012.6発行⁴）で開かれました。この会では、野口は、済生学舎のことやアメリカ医学事情などに会話が弾んだとされています⁵。

一時帰国後、野口は、1917（大正6）年5月24日に日本滞在中におこなった全国講演、親孝行などの疲労が蓄積し、

腸チフスにかかり米国ニューヨーク市マウントサイナイ病院に入院し、一時危篤状態に陥るも同年7月22日には軽快退院しております。その時の野口の病状は、本邦の新聞（東京朝日新聞大正6年5月30日に「世界的学者日本の誇 野口英世博士危篤」⁶）と報道されました。その野口の病気を気遣った済生学舎同窓の和仁真一（済生学舎明治31年卒業）は、野口に見舞い状を送っております。そこで野口は、病気軽快後の同年8月に米国より和仁の見舞い状として返礼絵葉書をよこしております。図5の新聞記事は、野口と和仁との親しさを表す米国から2通の近況報告の内一枚の絵葉書の存在であり、この野口病後の絵葉書は先にも述べた和仁の見舞い状に対しての野口から御礼状であります。またここには野口が和仁大兄宛に野口の予定を書き添えて渡した野口の名刺も発見されたことが掲載されています⁷。和仁真一の簡略歴から野口との関係性を触れます。和仁は、済生学舎卒業後、東京杏雲堂病院に勤務し、明治37年神奈川縣國府津町で開業しております。またその間に



図5 野口英世から和仁真一へ宛てられたはがきと名刺。読売新聞。2009年11月16日、朝刊、全国版（第48036号14版社会面36ページ）
 「2009年11月16日読売新聞提供縮刷版」

和仁は、明治34年6月から東京歯科医学院で歯科薬物学講師を務めております。また、野口も、同時期に東京歯科医学院で病理総論の講師であり⁸、そのころより、野口と和仁は、同時期の済生学舎卒業の親友で友人関係であったものと思われまふ。更に野口と和仁の親交は、野口が大正4年11月4日に一時帰国後の再渡米の際に佐渡丸船上の甲板で野口を囲む恩師らと一緒に記念写真にも納まっていることにも表れております。

おわりに

本稿では、野口英世が、日本医科大学前身の明治期の代表的私立医学校である済生学舎を卒業した証左を、若干の文献の検索とともに供覧しました。

謝辞：本稿の先行研究を先達としてお導きくださった日本医史学会功労会員故唐澤信安先生に衷心より感謝を捧げる次第であります。

野口英世の付図については公益財団法人野口英世記念会森田鉄平先生にご教示をいただき、貴重なオリジナル資料を基に作成し、掲載することができました。深くお礼申し上げます。

Conflict of Interest：開示すべき利益相反はなし。

文 献

1. 志村俊郎, 弦間昭彦：日本医科大学前身の済生学舎

一済生救民と長谷泰をめぐる人々―。日医大医学会誌 2022; 18: 86-97.
 2. 唐沢信安：済生学舎時代の野口英世―細菌学への道程（野口英世―21世紀に生きる。〔小暮葉満子, 田崎公司編〕。2004; pp. 20-64, 日本経済評論社 東京。
 3. 小松山六郎：27 留学の夢 素顔の野口英世（福島民友新聞社編）。2005; pp. 237-239, 歴史春秋出版 福島。
 4. 伊勢市：伊勢市史。第4巻（近代編）。第二章第三節（伊勢市編）。2012.6. 発行
 5. 小松山六郎：医聖 野口英世を育てた人々（福島民友新聞社編）。2008; pp. 137-141, 165-169, 歴史春秋出版 福島。
 6. 明治大正昭和新聞研究会（代表発行者 平野清介）：新聞集成大正編年史 大正六年度版 上 p. 791, 1979年9月25日刊行 東京。
 7. 唐澤信安：未発表データ
 8. 森山徳長, 石川達也, 長谷川正康：東京歯科医学院講義録第一輯の書誌学。日本歯科医史学会会誌 1987; 14: 97-101.

日本医科大学医学会雑誌は、本論文に対して、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際 (CC BY NC ND) ライセンス (<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>) を採用した。ライセンス採用後も、すべての論文の著作権については、日本医科大学医学会が保持するものとする。ライセンスが付与された論文については、非営利目的で、元の論文のクレジットを表示することを条件に、すべての者が、ダウンロード、二次使用、複製、再印刷、頒布を行うことができる。